

第3回 余市町立学校適正配置等検討委員会会議録

1. 日 時 令和4年12月26日（月） 午後6時から午後8時
2. 場 所 余市町役場3階301号会議室
3. 出席委員 河森計二委員（委員長）、彫谷泰嗣委員（副委員長）
高橋伸吾委員、水島希望委員、山下秀一委員、茂野栄司委員
角井 敦委員、高見伸吾委員、寺井一哉委員
4. 欠席委員 明村秀之委員、栗原有希委員、西岡知洋委員
5. 事務局 前坂教育長、中村教育部長、内田学校教育課長、住吉主幹、兼重係長
6. 会議の概要

【審 議】

①余市町立学校適正規模・適正配置基本計画（素案）について

（委員） 私は、各学校が平等に基本方針の恩恵を受けられるようにすべきと考える。そうすると、基本方針が「小規模校として存続する学校の選定」という、特定の学校を指定するような検討項目に繋がっているのだが、これは各校に平等に検討した結果と言えるのか。まず育成する人間像があり、これを3つに分解している。それぞれに対して教育行政の基本方針に繋がっている。私は、育成する人間像もどの学校に対しても共通と捉えている。あえて具体的に分解して、無理に検討項目に繋ぐ必要はあるのか。教育委員会の考え方として教育行政執行方針をそのように整理した、ということか。

（委員長） ご意見は、育成する人物像はどの学校の児童生徒に対しても変わらないはずなのに、3つに分かれていることが問題ということかと思う。育成する人物像から矢印を3つに分けるのではなく、そこから基本方針につながっている方がいいのでは、ということか。

（事務局） 委員長が仰ったように、育成する人物像は3つあるが、どの学校もその人物像を目指すことは共通していると認識している。

（委員） どの学校も目指すところが同じとすると、登小の扱いが子供たちにとって良いのか疑問に思う。子どもたちの人間性を育成することが重要という基本的な考え方がある。確かに登小は様々な取り組みを行っているが、人間性の育成という点で本当に良いのか。

（委員） 前回、自分も同様の発言をしたが、余市町の子どもたちは一律同じ水準の教育を受けないといけない。そうした中で資料を見ると、登小の児童数に対する先生の数が明らかに多い。また、登小の子どもたちが東中に入ったとき、きちんと馴染めるのか。登小の教育の手厚さは分かるが、中学校への進学が心配である。また、小規模校を維持するという考え方が必要ならば、登小にこだわる必要はないのでは。沢町小も学校施設が新しい。多様性という意味で小規模校を維持することは分かるが、今の登小を維持したままで進めるのは危ういのではないか。

（委員長） 小規模校の位置づけについて、登小以外の学校も同じように扱うのか、というご

意見だった。ここの内容は方向性として示した後に、改めて財政や老朽化など並行する他の委員会との兼ね合いも含めて検討すると思う。議事録も取っているので、この検討委員会の中でこういった意見が出ていた、ということは他の委員会や庁内で共有していただき、議論を繋げていただきたい。

(事務局) 先生の数についてご質問があったが、これは学級編成とあって、文部科学省が学級数や児童の数によって先生の数基準を定めている。登小では、今年度から特別支援学級が1学級増えており、先生も増員があった。そういった部分も含めてご理解いただきたい。

(委員長) 教育目標と学校施設の考え方がP16に整理されている。今回は老朽化という問題が前提にあり、また地域コミュニティの核という観点もある。子どもたちにとってこれで良いのか、という視点は確かにあるが、一方で地域の方々の声も無視はできない。登小の扱いはこうした中での議論かと思う。基本的な考え方はあるが、多様な選択肢の一つ、あるいは地域コミュニティの核として、当面の間は登小を統合の対象にしないという整理になっている。そういった中で先ほどの意見が、懸念材料としてこの委員会の中で出ていた、ということは事務局として受け取っていただきたい。

(委員) 私もこの3つの基本方針が、小規模校に対しても享受できるのか疑問に思う。先月、登小の視察をPTAで行い、不登校の児童が元気に通っている姿を見たが、確かに小規模校だからできることだと思う。他校で馴染めない子供たちが登小で学習できるのは良いことである。ただ、特色①にあるように、おやじの会が注目されていることは分かるが、おやじの会に積極的に取り組んでいる方が令和12年度以降にいるのか。今は時間がとやすい自営業の方が多いかもかもしれないが、それがいつまで続くのか。おやじの会を存続の理由として前面に出すべきではないのでは。また、今後は登小から進学する子が一人、二人になるとすると、その子たちへのケアは必須である。

(委員) 町民全体の利益から考えると、登小を存続させることには疑問が残る。この資料では統合まで今後7年間を見据えているが、その間になくなっていくかもしれない。コミュニティスクールのモデル校として当面の間は存続させて、統合が必要になった時は登小モデルが余市のコミュニティスクールのモデルになるように町全体に還元してほしい。

(委員長) ここで今の全てのご意見に対して結論を出すことは難しい。今回の計画では方向性ということを示すが、今の時点で全てを決めることに拘らずに、登小については少し自走させた中で、1つのポイントとなる令和12年までに、この委員会が出た意見と照合して、最終的な決定に結びつけば良い。今後、他の委員会でも検討する中で、この委員会での方向性としてこの計画が見られることになるが、確かに「小規模校として残す」という点が登小と結びついて強調されすぎている。この辺りの書きぶりは委員会でのご意見を反映して検討してほしい。

(委員) 方向性を検討する上での一つのエビデンスとしてアンケートが示されている。ただ、これから町が人口減少の中でコンパクトシティを目指すのかどうか、また若い世代をどこに呼び込むのかによって方向性が異なるのでは。余市のまちづくりのビジョンがこの検討に含まれないと、どういう方向性が良いのか最終的な判断が難しいのでは。一つのエビデンスとしてこの資料のアンケートやシミュレーションがあ

るのは良いと思うが、まちづくりのビジョンと全く別に議論するのではなく、まちづくりとの関係を含めて検討して欲しい。

(事務局) 現在、建設水道部で都市計画マスタープランと立地適正化計画を令和5年度の公表に向けて策定している。今後、双方で協議したい。

(委員) まず本日は様々な意見が出たが、これはこの委員会で望まれている状態かと思う。多数決で決める問題ではなく、余市町のまちづくりを定めた総合計画や、様々な費用とも関連するため、ここで様々な心配事を引き出しておき、我々としての結論を導くことができれば良い。私としては以前から申し上げているように理念ありきだと思う。つまり最後は子どもたちのためにならないといけないので、この場では色々な意見があっても良いと思う。3回の会議を経て議論が絞られてきていると感じる。理念の説明も丁寧になった。多様な選択肢の一つとして登小を維持する、という考え方に矢印が引かれているが、これは前回の会議で、幼稚園から小学校に上がる時に、様々な課題がある子どもたちが増えてきており、そういう子たちに丁寧に関わってほしいというご意見があり、それを踏まえたものだと思う。ただ、もし登小を維持するならば、登小自体も変えていく必要がある。先日、登小の名取校長も不登校の子どもたちへの教育には力を入れていきたいと仰っていた。また、2つのパターンが示され、校舎改修と統合を一体的に考えなければならぬという話だった。最終的にどちらのパターンに決定するにせよ、小学校6年間と中学校3年間の小中一貫教育は、施設が一体であっても分離であっても進めなければいけない。小中一貫教育では系統性と連続性が重要だが、私個人としては小学校・中学校の独自性やそれぞれの節目があることも大事なことだと思う。義務教育学校は4・3・2型が主流だが、私は余市町独自の形として6・3型も良いと思う。また、教職員数の話もあった。多様性を大切にすれば、小規模校の先生数も担保するべきだと思う。また、中学校に上がった時に集団に馴染めない子どもたちをケアする先生も必要である。極端な話、町費で支援する覚悟が必要では。今後の検討の中で、施設も人的な配置も含めて、余市町として最適な配置を検討して欲しい。

(委員長) 今回の計画では今後検討しやすいような方向性ということで整理するが、もし義務教育学校を作るなら余市町としてどのような教育を進めるのかという具体の検討が必要である。また、多様な子どもたち一人ひとりに対する見つけ方や手当の在り方も重要な視点である。

(委員) 幼稚園・保育園の話があった。私も既存施設と小中一貫校という2つの選択肢を残しておくべきだと思う。ただ、私個人としては義務教育学校を目指すべきとも思う。私どもの保育園もいずれどのような方向性にするのか検討しなければならないが、幼保・小・中の連続性はぜひ重視していただきたい。また、不登校児だけでなく支援が必要な子どもは年々増えている。ぜひその子たちも厚く支援してほしい。

(委員) 前回出席できていないのだが、今回皆さんの意見を聞いて概ねその通りだと思った。私としては、余市町としての学校教育に関するテーマのようなものがあって、その上で学校を小中一貫にするのか統合にするのかを検討するのが良いのではないかと、思った。

(委員長) 今はパターンを提示しておき、今後の検討で方向性を選択できることがまずは必要だと思う。今後、まちづくりとの兼ね合いの中で具体の方向性が決定すると思うが、その議論の際に、この委員会での意見がどのように繋がるのかが重要になる。

- (委員) P30 に費用の長期的な見通しが示されているが、この中に沢町小や西中の費用も含まれているのか。
- (事務局) P30 の計算には沢町小と西中の改修費用は含まれていない。
- (委員) そうすると、沢町小と西中は将来どのようになるのか。
- (委員) 角井委員のご質問は、沢町小や西中も含めて統合するつもりか、という意図かと思う。
- (事務局) 例えば「黒小+東中」の列の費用は、小学校であれば黒川小・沢町小・大川小の児童を対象として黒川小に統合する想定である。
- (委員) 今のような説明の場合でも義務教育学校の方が安くなるということか。沢町小と西中の考え方についてご説明いただきたい。
- (事務局) P33 を使って改めてご説明する。ケース1の場合、沢町小は黒川小または大川小に統合される。西中は東中または旭中に統合される。ケース2の場合は、黒川小・沢町小・大川小・東中・西中・旭中という6校が1つの義務教育学校に統合される。
- (委員) 今の話は地域の方に了承してもらえるのか。この方向性は西部地域から学校がなくなるということである。学校は地域コミュニティの核だが、本当に良いのか懸念がある。
- (事務局) 今回の検討は、まず議論の入口として複数学級が望ましいという点があり、その前提でシミュレーション等を行った。いずれにせよ西部地域の方々にも丁寧に説明していきたい。
- (委員) 私は、沢町小と西中は一つの義務教育学校になるという先入観があった。町外でも比較的小さな学校同士が義務教育学校になる例を見ていた。今の説明でよく分かった。
- (委員) 今回、様々な意見が出ており勉強になる。ケース1とケース2を並行して考えるということで、今後議論を重ねるべきだと思う。ただ老朽化の一つのポイントである令和12年が迫っている。いずれどちらかに舵を切らないといけないし、また切った後も大変だと思う。漠然とでも良いので大きなスケジュール感を示した方が今後の議論で意見が出やすいのでは。
- (委員長) 今回、この委員会の中では、こういう課題や懸念があるとご発言いただいた。その点を踏まえて町全体として考えていただきたい。ケース1、ケース2という選択肢がそれぞれ示されたが、それぞれに課題があることを皆様からご発言いただいたので、その対応について継続して検討する、ということで結論をまとめたいと思うが、よろしいか。今後のパブリックコメントの結果を踏まえて、もう一度内容を確認していければと思う。
- (事務局) 次回の開催は、パブリックコメント終了後の2月下旬を予定している。一部修正した資料を郵送したいと思うので、ご確認のほどよろしくお願いしたい。
- (委員長) 以上で本日の会議を終了する。